彦九郎山河

吉村昭

彦九郎山河

吉村　昭

彦九郎山河

一九九五年九月三十日　第一刷

定価はカバーに表示してあります

著者　吉村昭

発行者　湯川豊

発行所　株式会社　文藝春秋
〒一〇二　東京都千代田区紀尾井町三―二三

印刷　大日本印刷
製本　大口製本

万一落丁乱丁の場合は送料を当社負担でお取替えいたします。小社営業部宛お送り下さい

© Akira Yoshimura 1995

Printed in Japan

ISBN4－16－315820－0

彦九郎山河

装幀　蓬田やすひろ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一

初冬のやわらいだ陽光が、江戸の町々をつつんでいる。

牛込見附をすぎた高山彦九郎は、神楽坂のゆるやかな坂道をのぼっていた。

昨日は一日中木枯が吹き、道に馬糞まじりの土埃が舞いあがって総髪の髪も埃で白くなり、風も冷たく寒さが身にしみた。

このままきびしい冬の季節に入るのかと思ったが、今日は小春日和という言葉そのままに風もなく暖かい。坂にそってのびている武家屋敷の塀の上から山茶花の樹の枝がのぞいていて、開花した花の朱の色が鮮やかであった。

屋敷の塀が切れると、両側に茶、櫛、笄や小間物、紙、履物などを商う店がつづいていた。間口の広い店は少ないが、いずれの店も良材でつくられていて、柱も板も入念に拭き清められている。店の奥の畳に坐っている店主の顔には、堅実な商いをして店を守ってきた商人としての、自信の表情が浮かび出ていた。

家並には、町の匂いが感じられた。それは、商う品々からかすかに漂い出ているものなのだろうが、商人と客とが接触する体のぬくもりでもあるにちがいない。嬰児の泣き声がし、店の裏手からは、井戸のつるべの音もきこえる。店の前では、送り出した客に頭をさげている店主の姿もあった。

若い頃に故郷の上野国新田郡細谷村（群馬県太田市）から江戸に出て来て以来、しばしば江戸に長く滞在して多くの学友、知人を得、それらを訪れることを繰り返しているので、足をふみ入れぬ町はほとんどない。武家屋敷のつづく道は素気ない気がするが、町人の住む家々の密集する道や商店の並ぶ道を歩くと、人々の生活が感じられて好きであった。それに、江戸の町々には坂が所々にあって町の印象を多様なものにしている。坂道の両側にさまざまな商品を商う店がつづいている神楽坂は、かれには好ましいものに感じられ、いつもくつろいだ気分になる。

道には町駕籠がすぎ、荷を積んだ大八車が通る。

かれは、店の中に視線をむけながらゆっくりした足取りで坂をのぼっていったが、行願寺に入る小道の前にくると、江戸に来た時耳にした話が突然のように思い起こされ、寺の方向に視線をむけた。

その話をきいたのは、五年前の天明四（一七八四）年に江戸に来た時で、だれにきいたのか忘れたが、酒の席などで何度か耳にした。その年の前年の十月に珍しい仇討ちがあって、江戸市中の大きな話題になり瓦版にもなったという。

彦九郎は、その話を黙ってきいていたが、仇討ちが百姓によるものであることに身がひきしまるのを感じ、五年もたっているのにその内容は今でも鮮明に記憶している。

仇討ちは、神楽坂でおこなわれた。

二十二年前の明和四（一七六七）年、下総に住む百姓が同じ村の組頭となにかが原因で口論と

なり、百姓は激しい暴行をうけて傷を負わされた。百姓は組頭の粗暴な行為を憤り、訴え出ようとしたが、村役人などになだめられ、そのうちに傷が悪化して死亡した。
百姓には十二歳の息子がいたが、数年後、他の地に逃げていた組頭がほとぼりがさめたと考えたらしく、村の近くに姿を現わし、
「事はすべてすんだ。これからは大手をふって歩く」
と、笑いながら放言したということを人伝てにきいた。
息子は激怒し、仇を討つことを決意して田畠を弟にゆずり、江戸に出た。
組頭が常に刀を帯びているということをきいていた息子は、武家屋敷で下男奉公をするかたわら剣術を身につけようとして、武芸家の道場をたずねた。百姓には教えぬと素気なく断わった武芸家も、事情をきいて同情し、入門を許した。息子は一心に稽古にはげんだ。
天明三年十月初め、所用で神楽坂を通った息子は、組頭に似た男がかたわらを通りすぎるのに気づいた。が、少年時代見かけただけのことで組頭かどうか自信がなく、追うのをためらっているうちに男の姿を見失った。
やはり組頭にちがいないと思った息子は、その近くに住んでいるにちがいないと考えて、翌日から脇差を手に毎日神楽坂に足をむけることを繰り返した。
その日も屋敷での朝の仕事を終えて神楽坂に行くと、男が坂道をのぼってくるのを眼にした。息子は、店の内部をのぞいているようによそおいながら男が近づくのをうかがい、急に店の前をはなれると、男の前に立ちはだかった。
男は、驚いたように足をとめ、息子を見つめた。
息子は脇差の柄に手をかけ、故郷の村の名を口にし、組頭であろうと声をかけた。
「そうだが、何者だ」

男は、身がまえた。
息子は、父の仇、と叫んで脇差を引きぬいた。組頭は顔色を変え、後ろにさがりながら刀をぬいた。突然の出来事に、あたりは騒然となった。
息子は必死になって刀をふるい、その勢いに刀をたたき落とされた組頭は逃げ出し、近くの行願寺の境内へ走りこんだ。それを追って境内へ入った息子は、悲鳴をあげて逃げまわる組頭に何度も刀をたたきつけ、刀先を胸に突き刺して絶命させた。
やがてやってきた役人が、地面に坐りこんでいる息子を町奉行所に引き立て、取り調べをした。その結果、事情のすべてがあきらかになり、仇討ちが認められて無罪放免となった。百姓の仇討ちは初めてのことなので、神楽坂の仇討ちとして江戸市中の評判となり、年が明けても人々の口の端にのぼっていたのである。
行願寺の山門から見える境内に眼をむけてたたずんでいた高山彦九郎は、再び歩き出した。
彦九郎の先祖は戦国時代まで家格の高い武家であったが、その後帰農して郷士となり、かれは農民の出であった。百姓が父の仇討ちを果たしたことに強い衝撃をうけたのは、彦九郎も亡父の仇を討とうとしたことがあったからであった。
彦九郎の先祖高山遠江守は、上野国新田郡から出た新田義貞に、一族郎党をひきいて仕えていた有力な武将であった。義貞は、南北朝時代に後醍醐天皇の信任を得て朝廷の親衛軍となり、足利尊氏の室町幕府軍と戦い、敗北をかさねて越前国藤島で戦死した。
そのような先祖を持つ高山家では、代々それを誇りとし、朝廷を尊崇する気持をうけつぎ、江戸時代に入ってもそれは変わらなかった。高山家の者たちは神道を信仰し、神社への参拝もかかさない。
彦九郎の故郷は旗本筒井家の知行地で、高山家は筒井家にとってきわめていまわしい存在に

なっていた。

知行地を幕府からあたえられた旗本は、地頭として、警察権と一定限度の裁判権もまかされている。

地頭は、その地域で産出する米の四割を年貢米として徴収していた。その実務を担当するのは旗本の家老や用人で、かれらは知行地を巡回し、名主たちの出迎えをうけて田畠の検地や年貢の取り立てをおこなう。それらの米は、必要量だけ江戸の旗本の屋敷に駄馬や大八車ではこびこまれ、残りの米は現地で金に替えさせて、それを旗本に納入するのが習わしになっていた。

これらのことを円滑におこなうには、旗本と領民との間に親密な関係がたもたれていることが必要であった。そのため家老や用人たちは、領民の中に深く入りこみ、一方では権力をちらつかせながらも融和な空気をはぐくむことにつとめていた。

そうした家老や用人に領民は服従し、毎年正月十五日に知行地の名主たちがそろって江戸に出て旗本の屋敷におもむき、それぞれの地の名産品を差し出して旗本に新年の挨拶をするのを習わしとしていた。

そのような知行地で、高山家とその一族は、旗本の家老や用人たちと親しむどころか、近づくことすら避けていた。

郷士である高山家は細谷村の名家で、村民と親密な関係を得ようとしている筒井家にとって、知行地支配の上で大きな支障になっていた。自然に、筒井家では、高山家にきびしい監視の眼をそそぐようになった。そして、高山家の者たちが筒井家に背をむけているのは、先祖からうけつがれてきた反幕、朝廷崇拝の念によるものであることを知った。

高山家の者たちは、農民でありながら幼い頃から学問を修め、剣の道にもはげみ、男も女も教養を身につけていて和歌も詠じる。かれらには根強い幕府に対する反感があって、それが幕府に

仕える筒井家への反撥となっていた。高山家とその一族の屋敷は、知行地内での叛旗をひるがえす砦に近いもので、筒井家ではきわめて危険な一族として監視を強めていた。

筒井家は、高山家に対して圧力をくわえ、それに身の危険を感じた彦九郎の祖父貞正は、晩年に細谷村をはなれて次男長蔵の養子先である剣持家に身をひそめた。筒井家の弾圧は激しさを増し、高山家の者たちはそれにおびえるようになった。

そのうちに悲しむべき出来事が起こった。彦九郎の父彦八が命を絶たれたのである。

明和六（一七六九）年七月、彦八は、相模国（神奈川県）の大山にある阿夫利神社参拝の旅に出た。その途中、深夜、宿で熟睡中、何者かによって殺害された。彦八、五十三歳であった。

報せをうけた親族の者たちが遺体を引き取りにゆき、村にはこんで埋葬した。

彦八を殺したのはだれか。遺体を引き取りに行った親族の者は、現地で殺害者を目撃したものの証言を得ていたが、村とその近隣でひそかに流れている話とその証言とがかさなり合い、一人の人物が浮かびあがった。それは筒井家から放たれた男で、大山への旅にむかう彦八をひそかに尾行して村をはなれ、彦八が殺害された後、どこからともなくもどってきた。その男の人相が、現地で目撃された男のそれと合致した。

江戸で学問をまなんでいた彦九郎は、父の弟の長蔵からの手紙で父の死を知り、さらに父が筒井家にぞくした者によって殺害されたことも知って激しい憤りを感じ、報復を決意した。かれは二十三歳であった。

彦九郎は、細井平洲の私塾である嚶鳴館（おうめいかん）で儒学をまなんでいた。

平洲は尾張国知多郡平島村の富農の子として生まれ、幼くして学を志し、中西淡淵に師事して学才が花ひらき、第一の高弟となった。やがて淡淵の死後、かれは周囲の者から推されて淡淵の門人を指導することになり、江戸で嚶鳴館をひらいた。かれは、当代随一の儒者としてその名声

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

は天下にとどろいていた。道徳家であり情義をかねそなえた人格者でもあった。
彦九郎は、十九歳年長の師である平洲の学識に深い畏敬の念をいだくと同時に、人間としての魅力も感じていた。故郷に帰って父の仇を討てば、当然、筒井家によって捕えられ、極刑に処せられることはあきらかだった。かれは、これまで学業を伝授してくれた平洲に最後の別れの挨拶をしたかった。
彦九郎は、早朝に起きて体を清め髪をととのえ、平洲の学塾におもむいた。
平洲の前に手をついた彦九郎は、
「御挨拶申し上げたき儀がありまして、参上いたしました」
と、言った。
彦九郎のいつもとは異なったきびしい表情に、なにか重要な用件で来たと察した平洲は、かれを奥の座敷にみちびき、向かい合って坐った。
彦九郎は、故郷の叔父長蔵からの手紙で父の死を知り、さらに筒井家にぞくした者によって殺害されたことを悲痛な表情で述べた。
「私は、これより故郷にもどり父の無念をはらします」
彦九郎は、これまで学問をさずけてくれた平洲の学恩に対して感謝の言葉を述べ、
「仇を討ち果たした私に待っているのは、死です。もとより覚悟の上のことですが、江戸をはなれる前に先生においとま乞いを申し上げたく参上いたしました」
と、言って、再び頭を深くさげた。
平洲は感情を表に出す性格で、感激すると涙を流す。彦九郎は、師が心のこもったはげましの言葉をかけてくれるにちがいない、と思った。
平洲は無言であったが、やがて口を開いた。

「私は、親不孝者になにも言う言葉はない」
その声は、講義する折のきびしいひびきと同じであった。
思いがけぬ平洲の言葉に、彦九郎は顔をあげ、平洲を見つめた。
幼い頃から両親にならって神道を崇拝してきた彦九郎は、父母に孝行をつくすことを最も尊いものに考え、それは深く身についていると自らも感じていた。親不孝は最大の悪であり、平洲からそのように言われたことは、彦九郎にとってこの上ない侮辱であった。
彦九郎の眼に憤りの光が浮かび、体に小刻みなふるえが起こった。
「親不孝とは、聞き捨てなりませぬ。なに故、そのようなことを……」
彦九郎は喘ぐように言うと、平洲の顔に食い入るような眼をむけた。
「わからぬか」
平洲も彦九郎の顔に、視線を据えている。
「親不孝などと言われましては、死ぬにも死にきれませぬ」
師でなければつかみかかりたかった。
「仇を討てば、父親殿が喜ぶとでも思うのか」
平洲は、言った。
彦九郎は、平洲の顔に鋭い視線をむけている。
「故郷の事情では、仇を討てばお前も必ず殺される。お前が死んで、父親殿は喜ぶか」
平洲は、彦九郎の顔をのぞきこむように見つめている。
背筋を正した平洲は、儒学は現実の社会に活用する点に意義がある、という塾で常に教えていることを口にし、
「父親殿がお前に期待していたのは、この世を少しでも好ましいものにするということであった

はずだ。仇を討とうという気持は、私にもよくわかる。他の者がその決意を口にしたら、私もはげましの言葉をかけるであろう。しかし、お前には、なさねばならぬ大切な仕事がある。死んでしまっては、それも果たせぬ。父親殿の期待は失われてしまうではないか」

と、言った。

平洲は、さらに言葉をつづけた。

「仇を討てば、父親殿の無念をはらすことはできる。しかし殺された父親殿は、お前が死ぬのを決して望んではいない。生きて信ずる道を進むことを強く願っているはずだ。父親殿の意にそむくことを親不孝と言わずしてなんと言う。親不孝と申したのは、その意味からだ。わかるか」

平洲の声には、強いひびきがあった。

残暑がきびしく、庭の樹木からは蟬の鳴きしきる声がきこえている。平洲の顔を見つめていた彦九郎の眼に動揺の色が浮かび、視線を落とした。

「父親殿の死を無念に思うのなら、その気持を学問にはげむことにむけよ。それが殺された父親殿に対するなによりの孝行だ」

平洲は、さとすように言った。

彦九郎の眼から、静かに涙が流れた。

父彦八は逞しい体をしていて腕力が強く、弓術にも長じていた。襲われても容易には不覚をとることはなかったろうが、睡眠中に殺されたことが哀れであった。その無念をはらしたいが、平洲の言葉には正しい理（ことわり）があり、それに従うのが父に対する孝行だ、と彦九郎は思った。

行願寺への入口からはなれた彦九郎は、平洲の訓戒を受けた日のことを思い浮かべながら、神楽坂を歩いていった。平洲と対座した座敷で庭の樹木からきこえていた蟬の鳴きしきる声が、今

でも耳の底に残っている。

それから二十年――

彦九郎は、平洲に高弟として師事しながら、毎年のように京都、江戸をはじめ各地をくまなく旅をして多くの学者と親交をむすび、自分の考えを述べ相手の意見に耳をかたむけた。これらの旅によってかれの知識は豊かにふくれあがり、社会観も強固なものになっていた。

江戸幕府が開府以来百数十年がすぎて、その政治のもつ矛盾が各分野ではっきりとした形であらわれ、平洲は、儒学という学問の観点から社会の建て直しにつとめるべきだという信念をいだいていた。各藩の藩主の中には世の乱れを憂え、平洲の考え方に共感をおぼえて、その教えを請う者もいた。

まず、西条藩の世子（後の紀伊藩主松平治貞）が平洲をまねいてその講義を親しくうけ、また米沢藩の藩主上杉治憲（鷹山）も、明和八年、平洲を師として米沢にまねいた。安永九年に平洲は、故郷である尾張藩の藩主徳川宗睦の侍講となって藩政改革に貢献し、天明三年に創設された藩校明倫堂の総裁にも推され、多くの秀れた人材をうんだ。このように平洲は、儒学を単なる学問としてではなく、現実の社会改革に活用する姿勢をつらぬいていた。

この考え方に彦九郎は大きな影響をうけ、かれも儒学者ではありながら実践家として自分の考えを説いて精力的に旅をつづけていた。かれの理想は、幕府の武家政治を排し、朝廷を中心とした文治政治であり、それは必然的に反体制の危険思想をもつ人物とみなされるようになっていた。

彦九郎の父彦八が筒井家の刺客によって殺害された後も、高山家一族の幕府政治に対する反感は少しもゆらぐことはなかった。

彦八には、蓮沼家をついだ要右衛門と剣持家に養子に入った長蔵の二人の弟があった。ことに長蔵は、先祖以来の朝廷崇拝の思想を強くうけつぎ、彦八と同じように神社参拝を繰り返してい

た。かれは、馬庭念流の剣術に長じ、書物を多く読み、和歌も詠じていた。
彦九郎は幼い頃から長蔵の指導を受け、学問をまなび、剣術を修得した。
一族の中でただ一人、長蔵や彦九郎と全く異なった考え方をし行動している男がいた。彦九郎の兄専蔵で、専蔵は、父彦八の死後、長男であったので高山家をついでいた。
大地主の専蔵は、家と土地を守るには附近一帯を知行地とする筒井家に好感をいだかれねばならぬ、という強い信念をもっていて、父が殺されたことも筒井家に反撥していた当然の結果とさえ考えていた。
かれは、家をつぐと同時に筒井家の家老や用人に積極的に接近し、忠誠をちかった。その態度に、筒井家は専蔵を好遇した。
専蔵は、弟の彦九郎が高山家の存続に大きな障害になると考えていた。専蔵は、幕府政治を否定することから筒井家に反感をいだく彦九郎に対して、高山家のためにもそのような態度をあらためるよう強くせまった。が、彦九郎は反幕思想は先祖からうけついだもので、専蔵こそ先祖の意志に反すると反論し、二人の間に激論が繰り返された。それは平行線をたどり、専蔵は、彦九郎に激しい憎しみをいだくようになった。
専蔵は、農家に生まれながら学問をまなび諸国を旅して歩く彦九郎に憤りを感じていた。彦九郎の旅費は、祖父貞正が社会建て直しに力をつくす子孫のために遺した千両の金を管理する、叔父の剣持長蔵からあたえられていた。そうしたことから、専蔵は、長蔵にも憎悪の念をいだいていた。
彦九郎は、しもという内妻との間にせいという女子をもうけていたが、しもを離縁した後、さきを内妻に迎えた。さきは、稀なほどの醜女であったが、しもとちがって豊かな教養をもっていて、彦九郎はさきを愛していた。さきは、さと、義介、りよの二女一男をうんだ。

専蔵の彦九郎に対する憎しみは、旅をしている間留守をまもる彦九郎の妻や子にもむけられていた。

やがてその憎しみは、彦九郎の身に思いがけぬ災厄をもたらした。

三年前の天明六（一七八六）年八月二十四日、祖母のりんが死去した。りんは彦九郎の深い理解者で、彦九郎の妻子の生活の面倒を見、専蔵のむごい仕打ちからも守ってくれていた。彦九郎にとってりんは、慈母にも似た恩人であった。

その死を嘆き悲しんだ彦九郎は、神道の古いしきたりにしたがって、りんの子である叔父の剣持長蔵とともに、三年間の長い喪に服した。

祖母の葬られた墓のかたわらに粗末な仮りの小屋をつくり、そこにとじこもって初めの六カ月間は無言の行をおこなった。やがて雪が舞い寒気がきびしくなったが、二人は小屋の中で寒さに身をふるわせながら、祖母の霊をなぐさめるための拝礼をつづけた。梅の花が開き、無言の行が終わって、彦九郎と長蔵は、拝礼にくる家族や親族と初めて口をきいた。

二人の徹底した服喪は評判になり、村内はもとより近在からも訪れる者が増し、かれらは墓前に香花を手向け、賽銭をそなえる者もいた。二人はそれらの者たちに礼を述べながらも、額を床につけて拝礼することを繰り返していた。

そのうちに服喪の行は、遠く江戸まで広く知れわたり、幕府から彦九郎に江戸へくるようにという出頭命令があった。幕府は、道徳の普及のために全国の孝子や貞淑な妻、主人に忠義をつくす者などを表彰していて、三年間の服喪をつづけた彦九郎を孝子として江戸に招いたのである。

彦九郎は喪が明けると村をはなれ、江戸の町奉行所におもむいた。表彰されると思っていたが、意外にもかれは、荒々しく縄を打たれ、唐丸籠に押しこめられて日本橋小伝馬町の牢屋敷に護送され、百姓牢に投じられた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.